

## 「天職・天驕」意識と「権威・虎威」志向：指導者の条件

夏

剛

### 「天職」意識・「凝聚力」

当代の日本の富裕の故の浮遊感覚と中国の窮乏の故の「救亡」（滅亡から国を救う）意識、日本の指導者の「飽食忘憂」と中国の指導者の「発憤忘食」には、次の世紀の両国の進路が見えて来る。韓非子の「孤憤」と通じる「発憤」は、「奇恥大辱」に堪え抜いた司馬遷の偉業の原動力だ。孔子の「発憤忘食」の現代語訳に有る「用功」（勉学に励む）<sup>1)</sup>は、共産党中国の長年の合言葉 - 「発奮図強」の「図強」（向上を図る）と対を成す。

日本の政治家は指導力も言葉も乏しく、国会で只管棒読みする事から、leaderならぬreaderと揶揄された。緊張感の欠如は内患の少ない微温湯ぬるまじゆと共に、為政者の天職意識の稀薄の病根と成る。「天職」は今や「その人の天性に最も合った職業」の意に転じ、日本では「遊女の階級の一。天神の別称」にも言うが、古代中国では、「①天から命ぜられた職。イ天子が国家を統治する職務。口神聖な職務」を表わした（『広辞苑』）。

「天の与えた職務。当然尽くすべき職責」（『角川大辞源』）を指す「天職」は、孟子の「共天位・治天職・食天禄」の概念が語源だ。「天の職責。自然界の職務。天工」の意（同上）の例文には、荀子の「不為而成，不求而得，夫是之謂天職」と有る。後者の為さずに成り求めずに得る事は、「此の度は図らずも 〇〇に成りました」という、日本の政治家の当選の際の常套句を連想させるが、此の口上は勿論「空体語」・虚言の場合が多い。

首相の座を狙う中曽根康弘は縁起を担ぐ為に、巨人軍連続9年日本1に寄与した長嶋茂雄の旧居に引っ越し、其の後釜を脱む竹下登も似た動機で、面倒を厭わず故佐藤栄作邸に新居を構えた。其処まではしない他の面々も出陣の際は、神社で必勝を祈願しておく者だ。首相指名を受けた三木武夫の「晴天の霹靂」の台詞は、演技の容疑が払拭できない。武力鎮圧の霹靂の後で晴れて総書記に抜擢された江沢民こそ、正真正銘の「不求而得」か。

日本人は能動的「する」型より、自然発生的「なる」や静的「である」型に馴染むと言われるが、中国語の「成爲」（～に【と】成る）は、「為す・成る」を一体と見做す発想だ。為さないと成れぬ事は自明の理だが、政治家に成れば為さなくなる傾向が日本で強い事は、戦闘的な

激情が淑やかな恬淡へ転じ易い国民性の所為<sup>せい</sup>とは言い切れぬ。前々の論文<sup>2)</sup>で予告した「命・名」の文脈から、目標達成感と歴史使命感の対極が浮上して来る。

ニクソンは周恩来との通算15時間に及び会談で、相手の粘り強さと緻密な準備、巧みな交渉術、圧力に動じぬ冷静さに強い感動を覚えた。驚異的な粘りの例に挙げたのは、73歳の周の抜群な集中力だ。双方の若者でさえ通訳の単調な話を聞きながらウトウトしたりしたのに、彼だけが一貫して澆刺として注意を張り詰め、休憩を求める事も無かった<sup>3)</sup>。対照的に61歳の橋本首相は、98年先進国首脳会議の合間の音楽会で眠りに落ちた。

現在進行形の政治仮想小説・『三本の矢』(榊東行, 早川書房, 1998)は、無知の上で睡魔に負けた蔵相が国会答弁で失言し、金融恐慌を引き起す一幕が始まるが、其の二重の不手際・不徳の普遍性も、作品の迫真性<sup>リアリティ</sup>を織り成す要素だ。国際社会で悪評を浴びた silence (沈黙), smile (無意味な愛想笑い), sleep (doze. 居眠り) の様に、公的な場での居眠りは政治家に限らず、一種の「日本病」の観さえ有る。

日本の学者は此の不名誉な事の要因として、持続を重んじる農耕社会の生産方式を挙げた。年がら年中、四六時中、常に体力を温存しておく必要があるので、所構わず隙間を見て休みを取るのが日本人の得意技に成ったと言う。正当化の意図の有無は別として、同じ次元で考えれば、食生活の習慣や身体の素質も思い当たる。高い熱量の摂取にも因る狩猟民族・肉食人種の爆発力・精力には、農耕民族・菜食人種は一般論として太刀打ちできぬ。

曾て羽田孜元首相は、日本人の腸は欧米人より倍ほど長いという事実を挙げて、食生活に因る民族の特殊性を説明した。社会・文化の事象を考える場合は、物理的・生理的な次元の事情は確かに無視できぬ。但し、世界の非常識と見られる日本の常識を、単に国民性の現われとして片付けては、問題は矮小化しかねない。現に、日常的な食事の質素に於いては、中国も日本と余り違わないのに、年配の周恩来の精力は米国の若手を上回った。

毛沢東は十分な休息の合理性を説き、不休不眠を愚か者の無理としたが、「文武之道、一強一弛」の弁証法は、工作中的「常在戦場」と矛盾しない。大平正芳外相はアラブ諸国の特使と会見した時、目を瞑って聞いただけで凄い反感を買ったが、公的な場での公人の居眠りは国際社会では論外だ。葉剣英元帥は「四人組」主催の会合で、下らぬ論説への不満から故意に臉を閉じたが、肝心の華国鋒主席の態度表明の時は敏感に反応を示した<sup>4)</sup>。

其は礼・非礼の次元を超えて利害・死活に関わるから、緊張感を持つのは当たり前な事だ。中国の中央官庁では去年来、朱首相の「壮士断腕」の決意に由り、人員半減の機構「精簡」<sup>リストラ</sup>が進められた。削減案を討議する会議中に或る人が用便に立った処、其の隙に自分の首切りが提案され可決された、と伝えられている。周恩来は『詩経』の「戦戦兢兢、如臨深渊、如履薄氷」を常に銘記していたが、油断すれば首が飛びかねない状態が背景に有る。

周は毛の前では国会議員に仕える不器用な秘書みただった、と田中角栄は評した。優雅な

周がそう見えたとは信じ難いが、王座を窺う事の危険を知り尽くした彼は、意図的に一步引き下がったのだろう、とニクソンは見た<sup>5</sup>）。中共中央・國務院の所在地 - 北京・中南海並みに闘争や陰謀に満ちた白<sup>ホワイト・ハウス</sup>宮の主を長く務めただけに、後者の推論は当たっている。概して中国の実像は、近くて遠い日本よりも、遠くて近い米国の方には良く見える。

お人好しで無防備の微温湯社会を映す様に、日本自民党の派閥領袖の条件には、面倒見の良さと脇の甘さが挙げられた。田中派の会合で酔った（演技をした）竹下登が、「佐藤政権 安定成長 / 後に続くは 田中か福田 / その他人材 数々有れど / 10年経ったら竹下さん」と歌った処、角栄は「（首相は）未だ10年早い」と一喝したが、大した警戒も覚えず、此の子分に由る経世会の結成と自派の分裂への察知・阻止は出来なかった<sup>6</sup>）。

「文革」中の大衆の合い言葉には、「敬祝偉大領袖毛主席万寿無疆！」「敬祝林副統帥身体永遠健康！」が有った。毛沢東は或る文芸夕べで前半の方を聞くと、笑って隣の林彪を肘で突き、次は君の番だぞとからかった。彼の「親密戦友・接班人」は冗談として聞き流すどころか、感電の様な衝撃を受けた。自分への例の祝辞は此から省くよう早速指示したが、「紅太陽」との並列で毛の猜疑を招き、無用な危険が及ぶ事を危惧したわけだ。

曾て劉備は曹操の庇護を受けていた頃に、酒を飲みながら英雄談義を仕掛けられた。彼は各地の群雄の名を挙げたが、曹は彼等を「枯骨」「虚像」「番犬」「小人」等として否定し、天下の英雄は唯貴公と儂だと言った。劉は吃驚し手にしていた箸を思わず取り落としたが、都合良く其の時に雷が鳴り、彼は失態を装って誤魔化した。立派な男子も雷が恐ろしいのか、と曹は笑って疑いを消したが、其の安心は後日の強敵を逃す結果と成った。

『三国演義』の此の話には、詩が付いている。「勉従虎穴暫趨身、説破英雄驚殺人。巧借聞雷来掩飾、隨機应变信如神。」（勉めて虎穴より暫らく身を趨けしに、英雄を説き破りて人を驚殺す。巧に雷を聞くを借りて来て掩飾し、機に随い変に應ずること信に神の如し。小川環樹・金田純一郎訳<sup>7</sup>）自分を全知全能として過信する「信如神」は、角栄と共通の曹の失敗の要因だが、林彪は此の詩を秘かに写し、「伴君如伴虎」の緊張を託した。

写真機の閃光<sup>フラッシュ</sup>が毛沢東の目を刺激し過ぎないように、周恩来は閃光灯の改良を指示した。其の気配りと別の次元の配慮として、彼は毛と同席する際に光を領袖に集中させ、自分が陰に控えるよう腐心した。訪米の朱鎔基首相は経済人に中国との親善を促す為、「那我就把机会給欧州」（さもないと、私は機会を欧州にあげるよ）と脅かし、威名通りの「經濟沙皇<sup>ツァー</sup>」ぶりを発揮したが、国内の場合と同じく頻りに江主席を持ち上げたのも彼らしい。

其の「快刀斬乱麻」の剛腕と裏腹の憤み深さを訝り、限界の露呈と捉える見方が日本に有ったが、必要以上に見せた配慮は此以上に無い顧慮に由る必要なのだ。劉少奇の失脚は毛の政治路線との乖離と共に、著書・『論共産党員の修養』の発行部数が『毛沢東選集』を凌いでしまい、人気も毛と比肩しそうに成った事も大きいと言う。劉の個人崇拜を唱えた鄧小平は、会議

で何時も毛から遠く離れた処に座っていたが、此も毛の不興を買った。

鄧は天安門事件後の国際社会での孤立化を乗り切る為に、「けっしてせんとうにたつな決不出頭」の韜晦・雌伏を指示したが、陰への没我は無力や無視と取られる恐れがある。「出類拔萃」の「萃」は、64卦の1として聚集を表わし、古代では「聚」の意も有った<sup>8)</sup>。指導者や指導原理の条件として、昨今の中国では「凝聚力」が好く言われる。周が其の演出に協力した毛の「スポットライト聚光灯」の圏外に身を置こうとすれば、求心力と逆の「離心力」と疑われても仕方が無い。

『指導者とは』の「周恩来」に次ぐ章・「新しい世界」の中で、ニクソンは「注目されざる英雄」を13人取り上げた<sup>9)</sup>。群像に入ったエジプトのサダトは、誠実な人柄や強い自律心と瞑想的な性格に因り、元米大統領に深い印象を与えたが、ナセルの急死まで18年も副大統領として、舞台裏で待たされていた事に就いて、幸い個人的な野心の無い彼は、主の猜疑心を触発する事も無く、其の命令には唯々諾々と従っていた、と著者は言う。

### 「君命無二」・「中心鎮控」

英国植民地時代の入獄体験で鍛えられた其の忍耐の徳・行は、周恩来の「戦戦兢兢，如履薄氷」と重なるが、周に対する世人の誤解はサダトにも付き纏っていた。彼を「ナセルの愛玩用ブードル」と呼ぶ人も、彼の額のタコは1日に5回の祈りで床に擦り付けた為に出来たのではなく、閣議の間に居眠りせぬようナセルがびしゃびしゃ敲き続けた結果だ、と言う人が居た<sup>10)</sup>。後者の方は虚構の揶揄に違いないが、一面の真理が2つ含めてある。

宋太祖・趙匡胤は江南の使者に対し、「臥榻之側，豈容他人鼾睡」（我が寝台の側で他人が鼾をかいて寝るのは、容せるものか）と一喝した。天下は我が一家（宋王朝）でなければ成らぬのに、臣服しない国が隣に有る事は到底容認できない、という中華思想らしい主張だが、隣の席で臣下が傍若無人に居眠りする事は、君主には其以上に我慢できまい。件のナセルの挙動が事実だとしても、権威を維持する為の当り前な「弾圧」と言えよう。

但し、其の嫌味の流言を裏返すと、閣議中の居眠りは彼の国でも有り得る事に成る。眠気が起き易い熱帯の環境を考えれば、日本の閣僚よりは居眠りの必然性が認められようが、常に敲かないと睡魔が退治できぬ事は、人間の惰性の頑強さの現われと思える。適中の気候に恵まれる日本では逆に、居心地が良過ぎる所為で居眠りに落ちがちなのか。逆に、砂漠文化に於いて特に強い対人緊張感も、一瞬の緩みも許されぬ其の話から窺われる。

宋太祖は又、「一榻之外，皆他人家也」（我が寝台の他は、皆他人の家だ）と言った。「臥榻之側，豈容他人鼾睡」と同じく、唯我独尊の覇権主義の響きがするが、信頼し難い国々に取り囲まれて不安で眠れぬ、という観方<sup>11)</sup>も的を得ている。毛の「文革」発動の動機には、「高枕無憂」に程遠い権力や国家安全の危機感が有ったが、其の直前に唱えた「睡在我們身邊的赫魯

曉夫）（我々の身边に寝ているフルチョフ）への警戒は意味深長だ。

毛と劉少奇の同床異夢の以前の問題として、元より「寡人」の寝台は独り占めする物である。劉は「劉（国家）主席」と呼ばれるのを忌み、「主席」はあくまでも毛（党中央・中央軍事委員会）主席なのだ、と口酸っぱく<sup>ス タ ッ プ</sup>身边工作人員を注意した。其でも肅清の標的とされ、国家主席の職位自体まで消滅したから、権力の頂点は実に狭くて険しい。周がニクソンに紹介した毛の名句 - 「無限風光在險峰」<sup>12)</sup> から、別の意味が読み取れて来る。

林彪は或る大衆集会に出る時に、先着の毛を数分間待たせた。彼は秘書等の不手際を酷く叱り、遅刻は二度と無いよう秒単位の演習を繰り返させた<sup>13)</sup>。毛以下の主な中央首長の特別機が飛ぶ時に、沿線で飛行が全て禁じられる時代も有った<sup>14)</sup>。故に林は其の好きな格言の通り、「天馬行空、独往独来」の恣意・無羈を享受できる立場に在った。其でも異常な緻密さで恭順を示そうとした事は、至高で特別な羈絆・規範の絶対性の証に他ならぬ。

林は「文革」で一躍に「副統帥」と成った直後から、毛宛ての書類の常套句 - 「請主席閱」（主席の御高覧を請います）の「請」を、より敬虔な「呈」に直し、第三者が使った「副統帥」の呼び名も削るよう命じた<sup>15)</sup>。「天降大任」の君主に対する「出類拔萃」の傑物の劣位は、其の自己卑下に良く現われた。晩年の毛も引いた事の有る稽康の警句は、「木秀於林，風必摧之」（木が林の中に抜きん出れば、風が必ず此を打ち壊す）と言う。

足を引っ張る下や周りの者の妨害と別に、「出類拔萃之輩」が上空の「風」で首を落とす事が多い。「出る杭は打たれる」に当る中国の諺には、「槍打出頭鳥」（頭を出す鳥は鉄砲で打たれる）と有る。政治生命や物理的な命が懸かるから、左様の懸命な努力は情理に適う。「如履薄氷」の心構えが常に強いられるのは、熟語の「一失足成千古恨」（一度足が踏み外れると、千古の遺恨事に成る）の通り、些細な不用心も命取りに繋がる故だ。

一寸先は闇の世界だから、寸分の機微を心得る事は余計に要る。毛に対する林の気の遣い方は、「分寸感」（「間」の均衡感覚）の手本と言える。彼は毛より1～2分ほど先に着くよう心掛けたが、其の厳肅な綱渡りには十二分の苦心が有った。「一人之下」の圧力ばかり意識して、矢鱈に早めに行き領袖を待つと、他者に対して「万人之上」の矜持を失いかねない。遜と尊、損と存の間で均衡を保つ事も、保身並みに難しい「如履薄氷」か。

但し、重大な問題では「偉大的謙虚」は一度も無い、という毛の告白は林にも当て嵌まる。彼はやがて一連の従順と打って変わって、国家主席への就任に意欲を示した。「臥榻」独占の禁忌を破った彼は、「天怒」の制裁を受けたが、良く考えれば、「戰戰兢兢」の字面には、戦争・競争が出ている。毛は生涯の最後の大晦日に、鬪争だけが絶対的な不易だとニクソンの娘夫婦に語った<sup>16)</sup> が、君の命を狙う林との激突は其の命題を裏付けた。

『広辞苑』の「君命」（= 君主の命令）は、用例に『太平記』の「軍中の事は - を聞かず」が付いているのみだが、『角川大辞源』には成語の「君命無二」と「不辱君命」が有る。後者

は孫子の「将在外、君命有所不受」と共に、後で詳しく取り上げたいが、前者の語義は、「君主の命令は絶対である。一説に、君命は一カ所しか出るべきである。また一説に、君命に対しては二心があってはならない。〔左伝・僖四〕君命無二、古之制也」

天安門事件の「政治風波」の恰度20年前の69年4月、第9回党大会で林彪が正式に毛の後継者に指名された。半年後、彼は自分の権力の程を試すべく、「林副主席指示第1個号令」を全軍に下し、直ちに緊急戦備状態に入れと命じた。反戦車武器生産の加速や戦備当直・情報収集の強化等の内容は、中ソの軍事対抗の緊張状態からすれば順当に思えるが、党中央と中央軍事委員会、及び両機構の主席・毛の承認を得ずに出した事が異常だ。

中国の兵家の古来の常識では、外に居る將軍は実情に応じて君命を受けぬ場合も有る。先ず決断・実行をし後で報告する「先斬後奏」も、現代に生きる指導者の有力な手法だ。が、首都から遠く離れた蘇州から発令し、2日後に電話記録の形で最高統帥に上奏した副統帥の遣り方は、やはり許容範囲を超えた。周恩来の回覧を経た其の書類を、毛は追認するどころか自ら焼却し、文書保管の鉄則を無視して封筒にまで火を付けようとした<sup>17)</sup>。

政変を極度に恐れる毛政権の下では、中央軍委の批准が無いと小隊1個なりとも軍の異動が出来ぬ、という厳格な掟があった。解放軍は「文革」前期の公式見解に由り、「偉大な領袖・毛主席が自ら創設し指導し、林副主席が自ら指揮する」集団とされたが、国防相兼任の「直接指揮者」・林と雖も、独断で部隊を動かせる様では動乱に繋がりがかねぬ。そもそも毛は上記の定義に不満を持ち、「締造者」は何故指揮できないのかと零した<sup>18)</sup>。

林彪等は毛を祭り上げつつ実権を奪い取ろうとしたが、左様な手法は「架空」(宙に浮かせる)と言う。「最高指示」と平行する「副帥号令」で毛が怒ったのは、自尊心が傷付いた事よりも二心を読み取った故だ。中国語の「背」は「隠す。避ける」意も有るが、其の命令の欺瞞的な出し方は、背任・「背叛」の匂いがしたわけだ。指導者は秘書任せでは駄目だ、と毛は常に説いたが、指導力発揮と共に「架空」防止の意図も含まれよう<sup>19)</sup>。

彼の逝去を伴う政治的な空白の中で、「四人組」打倒を画策した華国鋒主席は、後に宣伝部門制圧の重任を負う耿飈將軍に対し、電話で儂の声を聞くまでは重要な事は喋るな、儂の秘書の言葉でも信用しては成らぬ、と念を押した。古今を問わぬ「偽造聖旨」の頻発を思い起こせば、神経質に聞こえる其の警戒は、正当な自衛措置と言えよう。現に、敵の王洪文は副主席の権限を利用し、各地の首長に自分へ報告し指示を仰ぐよう命じた<sup>20)</sup>。

チャーチルとドゴールの演説は原稿を自ら書き、完全暗記の上で披露したのである。神格性<sup>カリスマ</sup>の演出や自尊心の発露としてニクソンに感銘を与えた<sup>21)</sup>が、文書は必ず自分で起草する毛の主義は、「導師」と「統帥」の字形の相通の象徴性を証す。主座や「天声」に対する集権体制や独裁指導者の執着は、秘書が官僚が書いた原稿を読む日本の readers の「真空」<sup>チェンゴン</sup>と対蹠で、同音の反意語(私の造語) - 「鎮控」<sup>チェンゴン</sup>(制御・支配)が特徴だ。

84年5月20日、鄧小平は全国人民代表大会・全国政治協商会議の香港・<sup>マカオ</sup>澳門地区代表と会見した後、香港記者団を呼び止めて異例の声明を発表した。香港問題に関する中央政府の発言は、私、趙総理、國務院港澳弁公室主任、外交部長、香港問題担当の發言人、及び新華社通信香港支社長の発言が正式の物で、其以外の全ての発言は無効だ；黃華（元外相）と耿飆（元国防相）の最近の発言は「胡説八道」<sup>でたらめ</sup>（出鱈目）だ、との2点である。

2人の全人代副委員長（国会副議長）への「突然襲撃」は、5年後の同じ日の戒嚴令発動と同じく、「最後の皇帝」の乱心と見られたが、80歳の恍惚とは言えない。将来の国連中国代表团に香港代表を入れても良い、中国軍は香港に駐屯しない、という彼等の発言は中央の方針から逸脱したからだ。其の頃は一介の広州市計画委员会主任までが、返還後の香港の在り方に就いて勝手な構想を述べ、中央筋が慌て取り消しさせた程だった<sup>22</sup>。

「自行其是」（自らの判断で行動する）の習性が強いから、中国人は孫文が言う「一盤散沙」の様相を呈し、故に衝撃療法<sup>ショック</sup>も時には止むを得ないが、晩年の毛沢東が戒めた「多中心即無中心」の無政府状態は、今の日本でも見られる。米国では金利や為替に就いて発言権を持つ要人は、財務長官と連邦準備委員会議長に限ると言うが、日本では口を出す政府高官や与党幹部が多過ぎて、不要な混乱を招き一貫性を欠く嫌いが有ると言われる。

### 「一代天驕」・「替天行道」

欧州通貨<sup>ユーロ</sup>の相場も誕生の初年度（1999）に、域内の多くの関係者の発言でぶれ続けた。但し此の場合は、元より舵取りの多い大連合艦隊だし、試行錯誤を免れぬ船出の段階に在るので、仕方が無い面も否めない。日本は法治国家の体裁を取っており、而も1955年体制の成立後、事実上の1党（自民党）・1派（党内最大派閥）独裁の歴史が長い。なのに平成以来、「総理（官房長官）は2、3人」の揶揄が絶えぬのは、些か不思議だ。

小淵首相は自らの或る決断に就いて、トップダウンで申し訳ないと釈明したが、「自上而下」は国家運営の通常で且つ究極の手法だから、首相が後ろ目痛さを感じる事は無い。彼一流の自己卑下の形象演出<sup>イメージ</sup>であろうが、当節の指導者の普遍的な萎縮の縮図にも映る。阪神大震災の際に村山首相の指導力が疑われたのは、情報不足に因る始動の遅れだけではなく、私権や法令・細則等の足枷に縛られて、果敢な「兵力」投入が出来なかった故だ。

李登輝は『台湾の主張』（1999）の中で、自分が学生と実務家として多くを学んだ日本に対し、政治・経済・文化の多岐に亘って苦言を呈した。此の国が底力を振えずに停滞し、国際社会で幼い行動を取る現状の要因には、戦後という時代の問題や政治家の世襲化という制度の問題と共に、日本人の特性も有る；日本人は参謀役を務める時には素晴らしい能力を発揮できるが、自ら前面に立つと成ると、途端に弱味が出てしまう、と言う。

日本人の真面目さに由って作り上げられた各部分は優秀でも、部分を組み合わせると全体で実践に移す場合には、日本人が重んじている能力を超えた精神的な要素、特に信念の支えが要るのだ、と李は主張した。政治的な大局観や人間の幅に対する彼の要求は、「大きく太く」に尽きる<sup>23)</sup>。自分は「掛帥」(統帥する)の資格は無く、「只能当助手、不能当舵手」という周恩来の自己分析<sup>24)</sup>と合わせて、最高指導者の要件が浮き彫りに成る。

彼の名宰相が助手には向き舵取りには成れぬのは、細小の処まで気を配る能吏の限界と言うより、熟語の「非不能、而不為也」の通りだ。日本の国技 - 相撲の「心・技・体」の価値順位と通じて、偉大な或いは高位に在る指導者ほど、精神力を多く備えるか求められる。蒙古が起源とされ日本で礼法化した相撲は、正に前出の「野・文」の二極を結合させた物だが、毛は蒙古帝国の始祖・成吉思汗(ジンギスカン)を中華民族の5大帝王の1人として讃えた。

「一代天驕、成吉思汗、只識弯弓射大雕。」(一代の天驕、成吉思汗も、只弓をひきて大雕を射るを識るのみ。竹内実訳<sup>25)</sup>)彼の狩猟民族の首領の蛮勇に対する此の低い評価は、其の万有・一切有為の気概への高い評価とも取れる。匈奴の人々は「天之驕子」と自称し、天の寵愛を受ける特別な存在と自任したが、此の熟語は「鋼鉄長城」と共に、中国人民解放軍の美名と成った。中華思想も突き詰めれば、「天驕」意識に他ならない。

孔門弟子の「具体而微」の限界と関わって、同じ孟子の語録には「万物皆備於我」が有る。「万物の道理は皆、(生まれながらに)自分の本性に備わっている」<sup>26)</sup>、「宇宙間に於ける全ての事物の理法は、悉く我が身の内に具有されている」<sup>27)</sup>、等と解されるが、其の「自誠」<sup>28)</sup>・本能説に対して、林彪が此を写したのは「能動詞」の心算か。「吾善養吾胸中浩然之氣」と孟子は言ったが、「氣貫長虹」と「氣呑山河」とは微妙に違う物だ。

同じ気宇壮大を表わす成語でも、後者は成吉思汗の侵略行為の様に、王道と逆の覇道の可能性を孕む。「万物皆備於我」は『尽心章句上』に出たが、「尽心」の字面には、心を尽くす奉仕・細緻と、心に尽きる唯心主義・唯意志論の両義が取れる。陰陽原理の諸刃の剣の性質を映す様に、中国語の「驕傲」は傲慢の意の反面、「自豪」(自慢)と同じく肯定的な使い方も有るが、「自豪」の「豪情」も度を過ぎると、自惚れ・強情に転じ易い。

毛は林彪事件の前後に党・軍の内部で、「反驕破満」(驕傲に反対し自己満足を打破する)運動を起した。其の頃に復帰した鄧の「鋼鉄公司」の矛先も、「鋼鉄長城」を蝕みつつかある「心中賊」に向いた。天安門事件後の彼は返す刀、武力鎮圧の急先鋒 - 楊尚昆(中央軍事委員会副主席)・白氷(解放軍総政治部主任)兄弟の実権を解いた。改革・開放の護送艦隊と自任する彼等の「天驕」振りが、屋上屋の設置を企む野心に映ったわけだ。

鄧の掉尾の一振の狙いは、「尾大不掉」を防ぐ事である。『左伝・昭公11年』が出典の此の成語は、「動物の尾が余り大きいと、自力では振り動かすことが出来ない。臣下の権力が強く、君主の自由に成らないことの譬え」(『角川大辞源』)だ。鄧は楊尚昆と長年の親交が有り、楊

の息子は鄒の専属撮影記者だから、「楊家将」に対する処置は、自ら選んだ総書記の胡耀邦・趙紫陽を相次いで斬った事よりも、非情な「断腕」と言える。

「護衛」云々が最高実力者の逆鱗に触れたのは、比肩・凌駕を許さぬ君主の神聖不可侵性の為か。11歳の「児皇帝」・溥儀は弟と遊んでいた最中、禁色の「明黄」を使った相手の袖がちらっ目に付くと、色を成して叱咤し弟を謝罪させた<sup>29</sup>。天皇と藤原一族が禁色の赤を共用した古代の日本と比べれば、中国の「天無二日、国無二主」の掟は数段も厳しい。君主の自称・「孤」は排他の意も含むが、器量の狭さと解すのは狭い見である。

「功高震主」の恐れから功臣を肅清するのは、中国の君主の慣習的な行動だが、天安門事件後の鄒は林彪事件後の毛と同じく、其の地位を揺すぶる様な勢力や野望は完全に消えていた。軍内の派閥の形成や軍自体の発言力の膨脹に対する彼の警戒は、個人の栄辱・盛衰を超えた憂慮と思われる。幼い溥儀は聖賢の名言を習う時に、「民為貴、社稷次之、君為輕」と「君君、臣臣、父父、子子」の矛盾に気付いた<sup>30</sup>が、其の両立も可能なのだ。

民や社稷を君の上に置く前者と、君と臣、父と子の厳然たる区別を説く後者を、最後の皇帝は其々、臣民向けの綺麗事と臣民への強制と受け止めたが、小乗的な政権の意志と大乘的な聖賢の理念、即物的な緊張感と高邁な天職意識（農民一揆の合言葉に好く使われた「替天行道」等）は、中国の政治及び為政者の現実・理想の両面を成して来た。孟子は君を二の次に位置付けたが、民・社稷の命運が懸かる君は、<sup>かなめ</sup>要の中の要の重みを持つ。

和を尊び衆知を集め没我に徹した周の助手根性に対して、舵取りの毛・鄒は主座・主我意識が強い。究極の「天之驕子」 - 天子は、神や歴史等の「天」から任命を受け、其のみに責任を感じる者だ。金字塔型の権力構造の頂上に自ら置いた後継者の權威を、鄒は「天」に替って守ろうとした事か。「是可忍、孰不可忍」で始まる『論語・八脩』には、孔明等が目標とした名宰相・管仲の、君主の待遇を享受した僭越への批判も出ている<sup>31</sup>。

其の前の節は、次の内容である。「哀公問社於宰我。宰我对曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗、曰、使民戰慄也。子聞之曰、成事不説、遂事不諫、既往不咎。」（哀公が〔樹を神体とする土地神の〕社の在り方を宰我に問った。宰我は答えた、「夏の君は松を用い、殷の人は柏を用い、周の人は栗を用い、其は民衆を戦慄させる為だと言う。」先生は此を聞いて曰く、「出来た事は言うまい、遂げた事は諫めまい、過ぎた事は咎めまい。」）

孔子は成語の「既往不咎」を以て、無闇に魯哀公を刺激した弟子を咎めたが、鄒の武力鎮圧を巡る賛否両論にも、寛容と非難の対極が見られた。遑って、孔子が政治・礼法の模範とした周の時代でも、社で行なう処刑に由って民衆を恐懼させる遣り方が有った。聖人の全体を具備していながら其の縮小版なる「微型聖人」の逆は、「巨型聖人」と言えようが、中国語の「孔」と「恐」<sup>コン</sup>、「巨」<sup>ジュイ</sup>と「懼」<sup>ジュイ</sup>の同音は、「大恐」原理の表徴に見える。

「天命・大人・聖人之言」に対する孔子の「君子三畏」は、権力者への恐れを含める。宋の

革新宰相・王安石の気炎は、「天変不足畏，祖宗不足法，人言不足恤」と言われたが，其の「大無畏」は世人の三畏を浮き彫りにする。孔子の「君子食無求飽，居無求安」も，「食求飽，居求安」の願望の裏返しだ。古代文人の「寧可食無肉，不可居無竹」，王安石の「人固不可一日無茶飲」の「清高」の嗜好も，其の清貧の志向と共に儒教の理想だ。

清の乾隆皇帝の「君不可一日無茶」は，「風流天子」の面目躍如たる処だが，国家主席を劉に譲った後の毛の喪失感に就いて，「君子不可一日無権」を以て講釈した者が居る<sup>32)</sup>。出所不明の此の古訓は，「君不可一日無権」なら解り易いが，天子なる君と君の下の君子，「君之道」と「君子道」は，王道が政治の建前である以上，階層の違いこそ有れば本質は一緒だ。但し，王道と霸道，無欲と大欲の表裏一体は，君にも君子にも大同小異だ。

少なくとも君の場合は，一朝権力を手放すと飲茶の権利も失いかねぬ。乾隆や清王朝の創始者・康熙は自ら詩文を書き，『四庫全書』や『康熙字典』を編纂させる等，文化面で幾多の業績・貢献を残したが，2人とも60年間もの長期政権が保てたのは，花鳥風月の「文」の裏の肅清・征伐の「野」のお陰だ。フルチョフの外見と内面の乖離を見抜いたニクソンは，彼の「墮ちた野人書記長」の失脚の要因を，恐怖政治を怠った事に帰した<sup>33)</sup>。

「持不同政見者」に対する「心慈手軟」を咎めて，鄧は2人の総書記を誅にした。趙紫陽の解任は止むを得ぬとしても，今だに続く半軟禁を訝る向きが海外に多い。西太后は名前の「慈禧」と裏腹に，1898年の維新変法の失敗後に光緒帝を10年も幽閉した。西安事件後の蒋介石は恩を讐に返し，「嚴加管教」の名に於いて張学良の自由を数十年も奪った。趙の待遇を此の2者と似た理不尽に思う人も居ようが，理外の理を理解すべきだ。

### 信望・権勢の枢紐 - 「威」

「四人組」失脚後，鄧は復職を図るべく華国鋒に書簡を送った。華主席は毛主席の後継者に相応しく，若さ故に其の指導は15～20年の安泰が保証できようと言い，万歳の連呼で結んだ忠誠の誓いだ。念願が適うなり忽ち華の追放を仕掛け，華の地位は結局5年しか保てなかったが，「華主席万歳」と「15～20年の安泰」の乖離は興味深い。2桁の后者は現実味を持つ故に精神安定剤に用いられたが，中途半端の期間には根拠が有る。

華政権の一定期間の存続を支持すると匂わす表現だが，15年後の華と鄧は其々70歳と87歳に成る。中共の長期政権の伝統と終身制打破の理想の折衷として，15年の任期は華と世論を納得させる妥当な線だ。他方，政治家は87歳まで長生きしても，体力も意欲も余り残らぬはずだ。故に「保証期間」の設定は無欲の意志表示として，領袖の地位に執着し始めた相手の警戒を解く妙手だと思うが，此の言質も確信犯的な空手形に過ぎぬ。

林彪事件後の鄧の復活の契機にも，毛への上申書が有る。自分に対する「文革」の批判を承

服し、巻き返しは永遠にせぬと誓ったが、咲き返しの直後から、「文革」否定に繋がる整頓を始めた。其の面従腹背に立腹した毛は、鄧の証文を「靠不住」（当てに成らぬ）としたが、孟子の「大人者、言不必信、行不必果」の逆説は、此等の食言にも適用できよう。「靠不住」は頼りに成らぬ意も有るが、華に弄した鄧の謀略も其処で正当性を持つ。

光緒の急逝は死ぬ間際の西太后が命じた暗殺らしいが、其の無情・無義は政治の世界の無常と共に、君主の二重の無上意識を示唆する。其は即ち、存命中の自分を至高の存在とし、死後の社稷を至高の存在とする思いだ。張学良に対する蔣の処置は、「奇恥大辱」の私怨に由る報復と思える。西太后が光緒の愛妃を殺したのも、「出類拔萃」の同性への嫉妬が動機だと言うが、其の最後の闘争の動機には、王朝の将来像の方が大きかったろう。

自分の守旧主義と合わぬ光緒に対する彼女の封殺は結局、中国の進歩を阻み弱体化を加速したが、毛の既定方針に拘る華を倒した鄧は逆に、極左路線との訣別や高度成長への離陸を促進した。彼の死後まで続いた趙紫陽の半軟禁は、後世の評価に任せる問題だが、近未来の安定維持の為の苦渋の一手と思われる。江政権は一応の基盤を固めたから、趙は脅威に成るまいはずだとの見方も有るが、其の安定は反対勢力を排除した土台に立つ物だ。

「15年の安泰」云々の虚言には其の大義と共に、不実と別次元の真実も含まれる。鄧の復権から92年の最後の闘争まで、恰度15年経った。15年を目安とした件は、心・技・体の弱体化や限界を自覚した72歳の彼の締切感覚の現われでもあろう。天安門事件の頃の趙と江は、其々70歳と63歳だった。其の後10年余りに及んだ趙の半軟禁は、元総書記の<sup>エネルギー</sup>エネルギーを消耗させ、新総書記の安泰を保証する工作と邪推されても仕方が無い。

鄧は武力鎮圧を決断した時に、人命の犠牲を20年の安定の代償と割り切った様だ。中国は阿片戦争以来の150年の間、20年続く安定に恵まれた事は皆無なので、決断の是非はともかく、歴史への責任感・緊張感を秘めた悲願と言えよう。「出類拔萃」の誉れが無かった江は一躍、「一代天驕」の頂上に浮上したが、鄧の思い切った抜擢と強引な応援は、彼個人に対する偏愛ではなく、自ら「天」として大任を降す天職意識の結果だろう。

新総書記の初期の執政の不慣れに対する鄧の辛抱は、後継者を頻繁に変えた晩年の毛の誤算や乱心を避ける深謀に違いないが、江の信望を高める戦略的な建設は、「大権独攬」の毛には出来なかった芸当だ。毛が林彪等の「大樹特樹毛沢東思想的絶対權威」（大いに特別に毛沢東思想の絶対的な權威を樹てよう）云々に反発した<sup>34</sup>のは、「護航艦」筆禍事件と同じく自尊心が傷付いた事も要因だが、軽量級の指導者には權威の樹立は欠かせぬ。

『広辞苑』の「權威」の項は、「(authoritv) ①他人を強制し服従させる威力。人に承認と服従の義務を要求する精神的・道徳的・社会的または法的威力。②その道で第一人者と認められている人。大家」と言う。和製語義の②は中国に逆輸出されたが、『辞海』の①は「権力と威勢」と解し、『呂氏春秋』の「若此則百官恟憂，少長相越，万邪並起，權威分移」を出典に挙

げ、②の定義の要点は「威望と支配の働きを持つ力」だ。

②の語釈は語源の auctoritas (ラテン語) の尊厳・権力と力量の意に言及したが、威望の威光・人望の両面は此と通じる。秦の宰相・呂不韋の主導で著された『呂氏春秋』も、「權威」の全ての意味を含む。一字でも添削し得た者には千金を与えようとの懸賞は、天を衝く自負で天下を圧倒する挑発だ。挑戦者が遂に出なかった事は、当人の権勢に対する恐懼も大きい、「一字千金」の転義の通り、実力の立派さも否定できない。

文武両道の權威の強化に腐心した呂不韋は、秦の始皇帝の父親とされる。60年代初めの毛は曰く、「我々は厳格な秩序が無ければ成らず、1人の秦始皇が必要だ。其の秦始皇は他ならぬ劉少奇で、私は彼の“附臣”(臣下)だ。」「封建社会主義」の色が滲み出た発言だが、秩序は權威を要求し權威は服従を要求するという原理には適う。共産党中国の「人民民主專政(独裁)」は、日本精神の伝統 - 衆知・和・主座の結合とも言える。

毛は後継者の劉の權威を樹てるべきだと言ったが、劉の厚い人望と国家主席の地位は、正に精神的・道徳的・社会的・法的威力だ。其の權威の過大に脅威を覚えた毛も、此等の全的な威力の強化を以て対抗した。彼は廬山会議で權威が挑戦された時に、自分への個人崇拜を劉・林に提唱させた。異心を感じた劉等の実権派を切ったのも、党・国の秩序の枢要と信じ込んだ自らの威信の維持の為だが、元より權威は権と威、権の威の多面を持つ。

「威」は「信望・権勢」の4文字と組めば、威信・威望・權威・威勢の多義を生む。「威<sup>ウエイ</sup>」と「維<sup>ウエイ</sup>・為<sup>ウエイ</sup>」の音通は、秩序維持の維(綱)の為(目的・行為)の性質を映す。日本語の「猛者<sup>モウジャ</sup>」と「亡者<sup>モウジャ</sup>」も、似た妙味を漂わす。勇猛な人や富裕で威勢の良い人を表わす前者は、「氣宇軒昂」の文脈と繋がる。死者や金銭・権力等に取り憑かれた人を言う後者は、「我利我利<sup>ガリガリ</sup>亡者<sup>モウジャ</sup>」の様に貶す意だが、猛者の心・技・体が無いと亡びる事は儘有る。

「不猛則亡」の法則の好例には、五代の南唐の君主・李煜が居る。鄧の再度の失脚・復活劇の丸千年前の頃、歡樂に耽り続けた彼は975年、金陵の陥落で唐の俘虜と成り、978年に41歳で毒殺された。彼の詞は纏綿・清麗の格調に因り、文学史に於いて高い地位を保って来たが、「惜秦皇漢武，略輸文采」(惜むらくは 秦皇 漢武，略 文采において輸け。竹内実訳<sup>35)</sup>)と言う毛沢東も、亡国の経歴<sup>せい</sup>の所為で其の作品まで毛嫌いだ。

傑物帝王群に対する毛の次の評は、「唐宗宋祖，稍遜風騷」(唐宗 宋祖，稍<sup>やや</sup> 風騷において<sup>ゆず</sup>遜る。同上)だ。960年の政変で天下を盗り、毛の逝去の丸千年前の976年に逝った宋太祖は、秦始皇・漢武帝に負けぬ「鋼鉄公司」の経営者だが、南唐を呑んだ宋もやがて氣運が傾いた。太祖生誕2百年の1127年に、書画の造詣で名高い「風流天子」・徽宗と欽宗(北宋皇帝)親子が金の俘虜と成り、南宋も1279年に元に征服された。

金が北宋を制してから満族が主体を成す清の崩壊まで、漢民族の王朝が北方の狩獵民族の侵攻・占領を受けた期間は、8百年の中の2/3にも及んだ。満州事件後に作られ、後に中華人

民共和国の国歌と成った『義勇軍行進曲』（聶耳作詞）は、「立ち上がれ、奴隷に成りたくない人々！我々の血と肉で新たな長城を築き上げよう……」と呼び掛ける。欧・米・日列強に凌辱された直近の怨念と共に、上記の一連の民族の遺恨の影もちら付く。

中華民族が万里の長城で防ごうとした外敵には成吉思汗も入るはずだが、毛の礼賛は英雄主義と必要な「天驕意識」の提唱に思える。始皇帝の気宇壮大な巡行を見た韓信は、男子は斯くべきであり「当取而代之」と賛嘆したが、恩讐を超える上昇・拡張志向は毛にも有った。杜甫『丹青引』の「英雄割拠雖已矣、文采風流今尚存」（英雄の割拠は已み矣と雖も、文采風流は今尚存す。竹内実訳<sup>36</sup>）は、毛の歴代「風流人物」観の根を示唆する。

抗日戦争と其の後の内戦の中で、中共指導者は保秘の為に変名を好く使った。名を命の如く重んじる中国の伝統に沿って、各々が編み出した変名は内面を映す。「全無敵」「共産黨員＝特殊材料」の文脈と通じて、毛の「李徳勝」は「離得勝」（離れて〔転進して〕勝利を得る）の語呂合わせであり、新中国建国の翌年に46歳で過労死した中央秘書長・任弼時の「史林」は、「司令」の語呂合わせ<sup>37</sup>）ながら、「史太林」の略語にも見える。

周恩来の「胡必成」も同じ精神主義の色彩を放つが、劉少奇の「胡服」と合わせて考えれば引掛かる。5大巨頭 - 毛・劉・周・朱（徳）・任の変名に、「大姓」（使用人口が非常に多い姓）でもない「胡」が2つも有る確率は、中共の長年の領袖と敵手・蒋介石の最初の夫人とが非「大姓」の「毛」を共有した事よりも低いはずだ。党内でも等距離外交に徹した周が敢えて劉の変名の姓を踏襲した事は、「胡」の特別な意味を暗示する。

「胡服」は『広辞苑』の語釈の通り、中国北方の民族 - 胡人の服装の名称だ。西北方面の遊牧・半遊牧民族の服飾を取り入れ、騎馬・射箭を習った趙の武靈王の「胡服騎射」は、戦国時代の改革・開放と言える。敵地に潜入した劉は此の固有名詞に、軽装で敏捷に動く形象を託したのかも知れぬが、81歳の毛が失明を治す手術の際に、歌曲で繰り返して聴いた南宋の抗金英雄・岳飛<sup>うた</sup>の詞には、「壮志飢餐胡虜肉、笑談渴飲匈奴血」と有る。

### 「虎威・虎気」「虎死留皮，人死留名」

壮志、飢えての餐は胡虜の肉、笑談、渴きて飲むは匈奴の血（竹内実訳<sup>38</sup>）。此の究極の闘争心と飢渴精神<sup>ハングリー</sup>の表現は、「大漢族主義」の民族差別とも取れる。特に匈奴を指す「胡」は、西戎・北狄等の「蛮族」の筆頭とされていた。漢語の「胡」も副詞として、矢鱈・出鱈目にと<sup>やたら</sup>という否定的な意だ。成吉思汗から5代目の元帝 - 元世祖・忽必烈<sup>フー</sup>の「忽」は「胡」と音通だが、「勿・心」から成る此の漢字の「粗忽」の語義は「胡」も持つ。

周辺民族を見下した孔子の像に元世祖が矢を放った伝説から考えても、「当代大儒」・周恩来と「胡」の組み合わせは妙だ。鄧の豪快な「鋼鉄公司」に対して、柔軟で緻密な周は「絲綢<sup>シルク</sup>

公司」か。「胡必成」は恣意の変名だろう<sup>39)</sup>が、蛮勇にも近い覇気への憧れが見え隠れする。周が戒めた「馬馬虎虎」(いい加減。大雑把)も、「胡・虎」の音通と符合して、副詞の「胡」に内包されるが、中国人の此の国民性は良い大きさ・太さをも含む。

周の「革命の為なら娼婦や妾に成っても構わぬ」主義にも、太く・不徳(超道徳)の一面が有るが、「虎」と「威」の接点に「虎威」が鍵言葉として出る。「天降大任・出類拔萃・不辱君命」の主題と吻合するが、党・軍の指導者たちを服従させた毛の権威には、群獣を恐れさせる威力が大きい。『易経・履卦』『書経・君牙』では、虎の尾を踏む事は大変な冒険の比喻とされるが、胡・趙両総書記の躓きは最高実力者の虎威を思い知らせた。

虎の尾を踏もうとした林に対する毛の「敲山震虎」は、永田町の馴れ合いと対照的な虎同士の見合いの構図を示した。隠居・在野・雌伏の身から世に進出する「出山」も、実力者の動物性を匂わす表現だ。ニクソンが嘆いたフルチョフの没落後の境遇は、熟語の「虎落平陽遭犬欺」(落ち零れた虎は犬に舐められる)で表わせるが、趙を半永久的に「鳥籠」に入れた必然性には、「放虎帰山」・虎を養って自ら患を残す懸念が推察できる。

フルチョフと同じく恐怖支配を怠った改革派書記長・ゴルバチョフの理想主義に因り、北の超大国は解体した。猛虎の優位を捨て群羊の劣位に甘んじる其の選択は、同時代の中国には自暴自棄に映った。「上品・礼儀正しい」に転義した「文質彬彬」を否定し、毛は紅衛兵に「要武」を勧めた。江沢民時代で寧ろ盛んに成った国威発揚の傾向は、伝統的な「耀武揚威」願望の延長と思えるが、強者志向を支える必要な張力として認められよう。

ニクソンは『回顧録1 栄光の日々』の『7 世界を変えた1週間』の中でも、周恩来の強い精神力と精力を賛嘆した。会談の半ば頃に周が錠剤を幾つか服んだ場面が、其の直ぐ前に出ている。高血圧の為の薬だろうと彼は推測した<sup>40)</sup>が、薬の服用を堂々と見せたのは自信の余裕や、秘薬を使わぬ事の証とも取れる。対して、「文革」中の林彪の公的な場で見せた「精神煥發」の形象は、極秘の麻薬注射に頼って無理遣りに維持した代物だ。

中国近代史の発端は阿片戦争の被侵略・敗戦だが、中共の彼の「常勝將軍」が反侵略の抗日戦争の中で負傷し、手術の為の麻酔の後遺症で阿片常習者と成ったのは、歴史の悪戯<sup>いたづら</sup>としか言い様が無い。1842年以降の百年程の中国の連戦連敗は、「東亜病夫」と呼ばれた国民の体質に要因が有る。若き毛の成名論文の題 - 『体育之研究』も、其の辺の事情を窺わせる。皮肉な事に、彼が選んだ後継者は選りに選って、「紙老虎」なのである。

毛は此の見立てで米帝と其の原子爆弾を嘲笑したが、麻薬が切れると脱け殻の如く崩れた林彪<sup>41)</sup>こそ、「外強中干」(外見は強そうでも中は空っぽ)の張り子の虎か。見掛け倒しを形容する熟語には、「銀様蠟槍頭」(銀の様に見えて蠟で出来た槍先)も有る。昔の男性強精剤の謳い文句 - 「金槍不倒」と合わせて、「堅挺・疲軟」の対極が再び出るが、中空ながらの「要強」(負けず嫌い)は、弱者の意地とも強者の勝ち気とも思える。

「文革」初期の毛沢東は夫人宛ての私信の中で、「戦略性伙伴」たる「朋友」・林彪の私心・野望への不安を吐露した。驚天動地の政治運動の発動に踏み切った彼は自分の性格を、主と成る「虎気」と副次的な「猴気」の複合体と規定したが、「虎気」と「彪」（小虎）の関わりは、格言の「両虎相争，必有一傷」を連想させる。今世紀前半の中国の国・共両党の闘いも戦後の米・ソの争覇も、「両雄不相（並）立」の原理を立証して来た。

謎めいた「虎気」は無慈悲とも思われるが、「虎尚不食子」（虎でさえ我が子を食わぬ）を傍証に挙げたい。天安門事件の後、一部の人は此の熟語を引き合いに出して、若者に対する非情な弾圧を批判したが、虎の二面性はやはり無慈悲の方が大前提だ。但し、虎の最も顕著な気質と言え、残忍よりも覇気が先ず思い浮かぶ。中華民族の自賛の言葉の「勤勞・勇敢・智慧」や、「大和魂」の「勇猛・潔い」<sup>42)</sup>にも、虎の勇・雄が含まれる。

『広辞苑』の「虎」の「②俗に、酔っぱらい」は、日本的な矮小化を感じさせる。「虎に成る」（ひどく酔っ払う）は、乱暴を形容する発想だろうが、中国人の虎の形象<sup>イメージ</sup>には、眠る時も片目を開けておく用心深さが有る。「狐」と音通（hu）の虎は、勇・智兼備の動物だ。「虎の威を借る狐」は同辞書で、「有力者の権勢をかさに着ていばるつまらぬ者のたとえ」と解されるが、『戦国策』が出典の此の成語は、中国では狡猾をも形容する。

林彪が率いた東北野戦軍は、随一の勇猛・頑強で「東北虎」の威名を得たが、其の虎の陽・剛の固定形象<sup>イメージ</sup>と裏腹に、平時の林は寡黙で沈思に耽る人だった。元より虎は孤独の性格を持ち、「多くは単独で森林・水辺にすみ、昼間は洞穴などに潜み、主に夕方から活動」（同上）するのだ。昼に睡眠を取り夕方から仕事に掛かる毛沢東の流儀は、「夜猫（梟）型」（夜型）を超えて虎型とも言えるが、「沢東」の字面には水辺の含みも有る<sup>43)</sup>。

彼は例の天下大乱の本格的な点火の直前に忽然と姿を晦まし、故郷の湖南・韶山の山奥の秘密別荘・「滴水洞」に12日も閉じ籠もった。政治的な遺書に当る夫人への書簡も、其の際の瞑想の産物であった。「始如处女，敵人開戸；後如脱兔，敵不及拒」（『孫子兵法』）の通り、後にいきなり武漢で長江を横断し泳ぎ、75歳にも拘らずの健康・軒昂を誇示したが、虎の特徴にも「水泳も巧みで種々の獣や鳥を捕食」が有る（『広辞苑』）。

ネコ科の哺乳類に属する虎は亜細亜の特産で、シベリアから亜細亜の東北・東南部、印度等の森林に生息するのだが、該当地域の戦前・戦後の軍国・覇権主義や独裁開発の在り方を思い浮かべる。「虎！虎！虎！」の暗号を使った日本軍の真珠湾攻撃は、「百獣之王」・獅子に次ぐ此の「亜王」の攻撃性を遺憾無く発揮したが、其の仁義無き奇襲（中国流では貶す意味の「偷（=盗）襲」）の成功は、狐並みの綿密な計算の結果に他ならぬ。

シベリアを擁するソ連を長年君臨したフルチョフも、其の粗野・道化は何時も計算が底に有った、とニクソンは言う<sup>44)</sup>。此の男が『指導者とは』に1章を占めたのは、好敵手を通して自分の評価を高めたい著者の意図も有ったろう<sup>45)</sup>が、著者が指摘した其の感情的な外観の裏の

冷静な理性や、レーニンやスターリン並みの思索好き<sup>46)</sup>は、紛れも無く指導者の素質だ。同じ蛮勇と細心を持ち合わせた日本の政治家は、田中角栄を置いて他無い。

昭和天皇は野暮な彼を嫌い、テレビで姿を見てはチャンネルを変えた程だ<sup>47)</sup>。其の潔癖は後に田中の不徳の疑惑で肯定されたが、強烈な個性への拒否反応も政治家の小物化の一因だ。林語堂はイエスの「鳩の如く素直に、蛇の様に慧く」を以て、蘇軾の二重性格を概括したが、日本は温良が有り過ぎ智勇が足りぬ国に成った。虎は「毛皮用に乱獲され、現在では各地で保護されている」(同上)が、日本に於ける「虎気」の衰退は目に余る。

虎の勇ましさは獲物への貪欲な執念が原動力を成すが、英雄の目的意識は其の即物性を超越した処が有る。「彪」の字形は「虎の表皮の縞模様の意」(『角川大辞源』)だが、「軒昂」の儀表・気概の両面の様に、「彪」との同音(biao)の「表」は此处では、成語の「虎死雄風在」(虎は死んでも雄風が残る)や、「虎死留皮，人死留名」(虎は死して皮を留め，人は死して名を残す)の様に、功績・名声・精神・風格等の含みを持つ。

毛は70年代の初め、「一不怕苦，二不怕死」(一に苦勞を恐れず，二に死を恐れぬ)、「人総是要有一点精神的」(人間は凡そ精神が無くては成らぬ)と呼び掛けた。80年、選挙戦の最中に心臓発作で倒れた大平首相(70歳)は、蒼白な顔に化粧をし病床の上でカメラにポーズを取った。やがて不帰の人と成ったが、其の「強打精神」(強いて元気を奮い立たせる)は、時限爆弾を抱えた決死の遊説と共に、精神力に由る強打と言えよう。

此の25年間に11回も選挙が有り、街頭演説もしなければ成らぬ、と田中角栄は毛沢東に言った。日本は選挙や国会が有って大変だねという毛の同情<sup>48)</sup>は、議会の代表選出も運営も形式的だった専制体制らしい反応だが、そんな余裕が有るにも関わらず、政治家の緊張感に於いて中国が日本を凌いでいるのは何故か。中国と同じく米ソと対抗し栄光有る孤立を続けたユーゴの終身大統領、大平首相と同じ年に逝去したチトーが手掛りと成る。

紙幅の関係で詳論は次の論考に譲るが、対象の複雑系を解明する戦略として、「心跡学」の主眼がより必要に成る。「病跡学」を擬った此の造語<sup>49)</sup>は、「玄之又玄，衆妙之門」に当る心的な態度を照射する接近だ。此の8字成句を説いた老子は、形而下を「器」とし形而上を「道」とし、「道可道，非常道。名可名，非常名」と言う。「命・名」を軸とする指導者の歴史責任感・緊張感の研究は、此から自意識と強迫観念の深層に迫って行く。

1999年師走

#### 註

- 1) 楊伯峻に由る孔子の「發憤忘食」の現代語訳は、「用功便忘記吃飯」(勉強し出すと食事を忘れる)。『論語訳注』，中華書局，1980年，71頁。
- 2) 夏剛『「生於憂患，死於安楽」：当代日中指導者の緊張感の比較』、『立命館国際研究』11巻3号，1999年，107～127頁。
- 3) 5) 10) 21) 33) 44) 46) リチャード・ニクソン『指導者とは』，徳岡孝夫訳，文芸春秋，1986

- 年（原題『LEADERS』，原典1982年），262，265，328，28，222～225，200，380～381頁。
- 4）産経新聞「毛沢東秘録」取材班『毛沢東秘録』，産経新聞ニュースサービス，1999年，105～106頁。
- 6）時代に因って関係者の固有名詞が何度も更新された此の歌は，色々な文献に出ているが，其の来歴の最も詳しい紹介には，早坂茂三の『駕籠に乗る人・担ぐ人 - 自民党裏面史に学ぶ』が有る。其に拠ると，竹下は昭和39年11月，第1次佐藤内閣の官房副長官に成ってから，此のズンドコ節の替え歌を作って歌い続けた。（1988年，祥伝社，12頁）
- 7）小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』（2），岩波文庫，1988年，188頁。
- 8）夏剛『「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（上）』（『立命館国際研究』12巻1号，1999年）参照。本論文は紀要の記念号の性質上，独立した一篇の体裁を取ったが，前回・前前回の号に掲載された此の系列<sup>シリーズ</sup>と通じる。従って前出の事柄に就いては，重複の講釈・注解を避けることにした。
- 9）「良き人・デ・ガスペリ（イタリア）」「反植民地運動の闘士エンクルマ（ガーナ）」「“色”に溺れたスカルノ（インドネシア）」「インド統一に賭けたネール」「フィリピンの建設者・マグサイサイ」「イスラエルの先導者ベン＝グリオン」「私のゴルダ・メイア（イスラエル）」「古い国の新しい指導者たち。まず，ナセル」「ナセルを継いだ男・サダト」「祖国イランの為に，パーレビ」「砂漠の中の近代化・ファイサル（サウジアラビア）」「小舞台の大俳優・リー・クアンユー（シンガポール）」「度胸があって辛辣・メンジス（オーストラリア）」
- 11）諸橋轍次『中国古典名言事典』，講談社，1972年，618頁。
- 12）「無限風光在險峰」は，毛の『七律・為李進同志題所攝廬山仙人洞照』（1961）の結びの句。周は井岡山を詠む毛の詩を引用した後，「別の中国の詩にも，危険なる山巔にこそ至高の美有りとなっています」と語った，という件がニクソンの回想録（文献3，264頁）に有るが，通訳の誤訳がニクソンの誤認と思われる。文献40，349頁にも同じ指摘が有り，上記の「井岡山」は其処では「廬山」とされる。
- 13）15）16）24）32）37）暁峰・明軍主編『毛沢東之謎』，中国人民大学出版社，1972年，104，同，192，105，263，66～68頁。
- 14）李克菲，彭東海『秘密專機上の領袖們』，中共中央党校出版社，1997年，122頁。
- 17）18）汪東興『汪東興回憶 - 毛沢東與林彪反革命集團的鬭爭』，当代中国出版社，1997年，14，22頁。
- 19）麻生幾の政治模擬小説・『日本侵略』には，北朝鮮の冒険主義的な若き急進派集団が「総書記秘書室」という名の権力基盤を作り，総書記を動かし首相を凌駕する，との話が有る（『産経新聞』1999年10月20日）。毛の後継者以上の権力を欲しがった林彪の焦燥も，息子と其の周辺の少壮幕僚集団に煽てられた物と見られる。秘書の権限を厳しく制限する毛の原則は，「君命」捏造の危険を防ぐ意味も有ろう。
- 20）青野・方雷『鄧小平在1976』（下），春風文芸出版社，1993年，259頁。
- 22）許家屯『香港回収工作』（上），青木まさこ・小須田秀幸・趙宏偉訳，築摩書房，1996年（原典『許家屯香港回憶録』，1993年，英文），124～125頁。
- 23）李登輝『台湾の主張』，P H P 研究所，1999年，158～160頁。
- 25）35）武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』，文芸春秋新社，216頁。毛が『沁園春・雪』（1936）の中で，彼の北方異民族の豪傑を「一代天驕」と讃えた事に就いて，拙論『中国的な

ナショナル・アイデンティティー

『国家・民族自覚を巡って』(上・中・下 = 『立命館言語文化研究』11巻4号, 12巻2・3号) 参照。

- 26) 内野熊一郎訳註『新釈漢文大系 4 孟子』, 明治書院, 1962年, 445頁(括弧の中の訳文は, 小林勝人訳註『孟子』下, 岩波文庫, 1972年, 323頁)。
- 27) 尾崎雄二郎等編『角川大字源』, 角川書店, 1992年, 26頁。
- 28) 同文献26, 446頁。
- 29) 30) 愛新覚羅・溥儀『我的前半生』, 群衆出版社, 1964年, 47~48, 63頁。
- 31) 「子曰, “管仲之器小哉!”(略)“然則管仲知礼乎?”曰, “邦君樹塞門, 管氏亦樹塞門。邦君為兩君之好, 有反坫, 管氏亦有反坫。管氏而知礼, 孰不知礼?”」
- 34) 『大樹特樹毛沢東思想的絶対権威』と題する論文が毛の不興を買い, 解放軍参謀総長・楊成武の失脚の一因と成った。但し, 後に名誉回復を果たした楊は此の論文には責任は無く, 名前が「四人組」に借用されただけだ(文献17, 138頁)。
- 36) 38) 同文献25, 218, 393頁。
- 39) 例えば, 当時の周は「美髯公」の渾名が有るほど, 長い髭を生やしていた。変名の姓・「胡」の由来には, 即物的な「胡(子)」「髭」も考えられよう。左様な恣意と「細意」の可能性の同居は, 中国・中国人を考える時は常に悩みの種だ。文献41の当事者は, 晩年の毛が好く人民大会堂の湖南庁(湖南の間)で外賓と会見した理由は, 「心細」(細心)の読者が想像する様な故郷への愛着ではなく, 大会堂の西門に最も近い場所の便利さだと言う(85~86頁)。但し, 周は鷹揚な毛と違って, 些細な事にも注意を払う人物だ。キッシンジャーとの最初の会談の場を福建庁にした事も, 福建に最も近い台湾の重要性を暗示したかった為だ。ところが, キッシンジャーは後に周から説明されるまで, 福建庁の名も知らなかったし, 70年に毛が米国ジャーナリストのスノーを国慶節祝典に招き, 2人の写真を『人民日報』の1面に載せた時と同じく, 其の意味も解らなかったので, 其の微妙な配慮は効果が無かった(『キッシンジャー秘録』第3巻『北京へ飛ぶ』, 斎藤弥三郎他訳, 小学館, 1980年[原典1979], 196頁)。
- 40) ニクソン『ニクソン回顧録』第1部『栄光の日々』, 松尾文夫・斎田一路訳, 1978年(原典同), 小学館, 337頁。
- 41) 「文革」後期に毛の専属撮影者・杜山の回想に拠ると, 林彪事件の3~4ヵ月前の71年5~6月, 林は天安門広場の花火大会, 外賓との会見の際に, 毛を置き去りにする形で無断で中座し戻らなかつたが, 麻薬切れに因る苦痛・脱力が其の異常な挙動の原因だ。(顧保孜『紅牆里的瞬間』, 解放軍文芸出版社, 1992年, 76~87頁)
- 42) 『広辞苑』の「大和魂」の語釈(第4, 5版)。
- 43) 毛沢東の名前に就いて, 『毛沢東の老師們』の編著者・尹高朝は, 「潤沢華夏大地, 恩惠東方」と取る向きを「望文生義」と断じ, 「沢」は一族が遠い昔に指定しておいた定番(其の前後の世代の名前の第1字は, 其々「祖」「恩」「貽」「沢」「遠」), 「東」は「東西南北」と「伯仲叔季」の対応から, 長男に当て嵌まる物だと説いた。(甘肅人民出版社, 1996年, 8頁)
- 45) 中・米頂上会談には, 次の遣り取りが有った。「毛 博士は中国訪問ですっかり有名に成りました。/キッシンジャー 方針を決め, 計画を練ったのは大統領です。/ニクソン 今の様に言ってくれる彼は, なかなか賢明な補佐官ですよ。(毛と周が笑う)/毛 彼が貴方を誉めるのは, 貴方の選択が賢明だと言いたいのでしょうか。」(ウィリアム・パー編『キッシンジャー「最高機密」会話録』, 鈴木主税・浅岡政子訳, 毎日新聞社, 1999年[原典同], 89頁) 中国人が好くお世辞を言うのは, 相手の誉め言葉を期待するからだ, と邱永漢は喝破した(『中国人と日本人』, 中央公論社,

「天職・天驕」意識と「権威・虎威」志向：指導者の条件（夏）

1993年，136頁）が，毛の推量は其の洞察を裏付けた。

47) 高野孟『田中角栄の読み方』，ごま書房，1983年，10頁。田中に対する昭和天皇の憎悪は，天皇訪米を勝手にニクソンに約束した（73年）という「商人的なりアリズム」に由る政治的な利用，及び建前だけに生きる天皇と本音だけに生きる角栄との気質の相違が原因だ，と著者は言う。（11～12，22，48頁）

48) 時事通信社編『北京交渉日記』，竹内実編『日中国交基本文献』（下），蒼蒼社，1993年，201頁。

49) 「病跡学」は『広辞苑』の通り，「個人の生涯を疾病，殊に精神病理学的な観点から研究分析し，その活動における疾病の意義を明らかにしようとする学問。芸術家・文学者・学者・政治家など傑出した人物を対象とすることが多い。パトグラフィー。」pathology（病理学。病理）から来た此の言葉に対して，中国語の「心跡」（心情。真意。心中）で名付けた「心跡学」は，健全な精神も対象とする概念だ。

（Xia Gang, 本学部助教授）